

苗焼けに注意

播種後、緑化期までは急激な温度上昇による"焼け"に注意をしてください。無加温出芽で被覆物（ベタ張り）をかけている時は、一時的な強い日差しでもハウス内温度がかなり上昇し、苗焼けを引き起こす場合があります。床土内部に温度計を設置し、床土温度が30℃を超えないように温度管理します。また、新しい屋根ビニールは日光透過率が高くハウス内温度が上昇しやすいため、新調した方は外気温が低くてもハウス内温度（床土温度）には注意が必要です。

今年も雑草は生えます

昨年、どこの田んぼにどの雑草が発生したか覚えていますか？除草剤は多くの種類に効果があるものと、効果が限定的なものがあります。用意した除草剤があなたの田んぼに生えている雑草に効果があるのか今一度確認してください。

- ◎初期剤では代かきから7日以内、一発剤では代かきから14日以内の散布が効果的です。
- ◎除草剤に記載されている「ノビエ〇葉期まで」という表記より-0.5葉を目安に早めの余裕を持った除草剤散布をしてください。
- ◎田植え期間が長期に渡る場合は「除草剤散布日」を必ず設定し作業計画に組み込むようにしてください。除草剤散布は「タイミング」です！

除草剤散布適期例と雑草葉齢進展の目安

- 除草剤散布は雑草が見える前に散布することが基本です。
- 気温状況により発芽・葉齢進展速度が早まります。

雑草葉齢進展の目安	代かき後日数	防除可能葉齢																												
		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20								
ノビエ		散布適期を逃さない				1.0葉					1.5葉					2.0葉					2.5葉					3.0葉				
ホタルイ												1.0葉					2.0葉					30葉								
除草剤散布体系	初期剤 + 一発剤	代かきと移植・除草剤の間はできるだけ短く！				初期除草剤					一発処理除草剤																			
	一発剤のみ	一発処理除草剤																												

除草剤成分流出防止し、安定した除草効果を得るために

除草剤散布後7日間は落水しない



散布時の水深は深めがGood！
粒剤：5cm以上
その他拡散剤：7cm以上

除草剤散布後、2～3日田面が露出しても除草効果に影響は無いので、じっとガマン！

差し水は散布後4日以降。除草剤処理層を壊さないようにゆっくりと行います。



水深確保

一時的に苗が沈んでも良いので深水にして除草剤を散布。粒剤は5cm以上、その他は7cm程度の深水とする。降雨によるオーバーフローに注意。

差し水時期

処理層が安定するまでは田面露出してもガマン！散布後4日以降にゆっくりと差し水する。

漏水防止

畦畔補修で漏水穴無くす。深水できる高さの畦畔を作る。

田面均平

田面高低差があると処理層形成されない。田面高低差の修正は丁寧な耕起・代かきです。

雑草多発ほ場は体系処理がキホン！

前年残草が多いほ場では、多種多数の雑草が長期間にわたって発芽、生育します。除草剤を効かせられる環境を作ったうえで、ダラダラ発生する雑草には「初期剤」+「一発剤」の体系処理をおこない、薬剤効果期間を伸ばしてやるのが基本です。場合によって「一発剤」+「一発剤」や「初期剤」+「中期剤」と状況に応じた組み合わせの検討も必要です。

初期剤	主にノビエ	ソルネット、エリジャン	+ 頼れる一発剤 ベッカク、 アツバ、 アツバ
	ノビエ、ホタルイ、オモダカ	ピラクロン、ショキニー	

No.2

農業技術情報



令和7年4月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



豊作に向けて土づくり、健苗育成を実施

令和7年産の稲作が始まりました。今年も高温傾向と予報されています。基本技術を確実に実施し、加えて高温への対策もしなければなりません。今月は土づくりと健苗育成を重点的に実践していきましょう。

今月の栽培技術留意点

健苗育成

健苗を田植えすることで、気温や除草剤に負けずに素早い活着と初期分けつが確保されやすくなります。今年も春先から高温予報ですので、苗焼けに注意してください。苗は寒さより暑さに弱いです。苗立枯病はハウス内が蒸れると出やすくなります。積極的にハウスを開放して換気、温度管理を徹底します。田植え前には追肥を必ず行い、素早い活着を目指します。

ケイ酸

ケイ酸は登熟歩合向上だけでなく高温や低温、日照不足でも根や稲体の活力維持に役立ちます。高温対策にケイ酸は不可欠です。管内土壌はまだケイ酸が不足しているため、再び猛暑となった場合、以前のような被害が発生しかねません。今こそ土壌にケイ酸を再投資し、高温でも収量・品質の高位安定化を図りましょう。

耕深と浅水代かき

今年も「根」の活力維持を意識した土づくりをします。土中の酸素が少ないと根が伸びにくくなります。耕起前にサブソイラや明渠によって乾田化促進させてください。耕起は固く締まった土をほぐし、碎土率を上げすぎず土塊が残る程度とします。代かきは、浅水で行い、ワラや雑草種子、肥料殻を土中に埋め込みます。下層の土塊による隙間を残しながら、上層を均平にします。

異常還元対策

土中の未熟有機物が多いと気温上昇とともに分解が始まり、ガス発生や土中が酸欠状態となり稲の生育に影響を及ぼします。今年も前年作のワラが多く、高温が予想されていることから、異常還元(ワキ)発生の危険性が高まっています。5月以降高温で経過した場合、田植え直後から異常還元が発生する可能性があるため、土中のガス抜きと酸素供給のため飽水管理や水の入れ替えを実施します。

安心のネットワーク
NOSAI から

農機具共済

《春期》加入運動実施中！

- 1台当り2,000万円まで加入OK！
- 買い替え報告は忘れなく。

稼動前に

※点検と
※加入で

ゆとりの農作業を…



健苗育成が高品質米づくりの第一歩

田植え後、素早く活着し初期生育のスタートダッシュを切るためには、健苗育成が欠かせません。目標とする苗質を確認して、健康で元気な苗となるように管理をしてください。

無加温出芽で被覆物（ベタ張り）除去後や育苗器から出芽苗をハウスに並べた後は、覆土の持ち上げりを落とす程度のかん水を行います。ハウスへの苗並べが夕方の場合、翌朝にかん水します。また、露出した種籾があったら見えなくなる程度に覆土します。

育苗期間はかん水温と床土温の差が少ない日の出から午前10時頃までの間にたっぷりとかん水します。夕方に行くと床土温度を下げるうえ、過湿になるため控えます。温度差によるストレスを与えないようにします。

出芽後の苗は極端な温度差にも弱く、当日の天気予報を確認しながらハウス内の温度管理を徹底させてください。日中は本田作業等でハウス管理が難しい場合は、朝から開放管理としてください。

種類	稚苗	中苗	密播・密苗
育苗期間	20～25日	35～40日	14～21日
葉数	2.5葉	3.5葉	2.3葉
草丈	10～13cm	13～15cm	10～15cm
必要箱数 (10aあたり)	70株……19箱 60株……16箱 50株……14箱	70株……22箱 60株……19箱 50株……16箱	70株……8箱 60株……7箱 50株……6箱
播種量	乾籾：144g/箱 催芽籾：172g/箱	乾籾：80g/箱 催芽籾：96g/箱	乾籾：300g/箱 催芽籾：360g/箱
出芽	無加温出芽（ベタ置き）の場合 週間天気予報を確認し、気温傾向に合わせた適切な被覆資材を選択すること。床土温度30℃を超えないように温度管理を。		
	加温出芽の場合 出芽長を伸ばしすぎないように。出芽長が長いとその後の生育も徒長気味に生育しやすくなります。蒸気出芽の場合、水槽の水が無くならないように確認を。		
第1葉鞘長	3.0～3.5cm	2.5cm程度	4.0～5.0cm
緑化期 ※中苗は播種後20日間	昼：20～25℃ 夜間：10～12℃		
かん水のポイント	夜間：5℃以上		
硬化期 ※田植え1週間前頃から	夜間：12℃以上		
	苗が若いうちは、体が小さく、水を吸う力も弱いので過剰なかん水は避けること。多湿になると酸欠になり、立枯病を誘発させてしまう。苗の大きさに合わせて朝イチにしっかりとかん水させること。		
追肥	昼：開放 夜間：5℃以上		
苗姿の目安	夜間：10℃以上		
	追肥をしっかりと行い、元気な苗を植えましょう。 ※右ページ参照		
	<p>稚苗 (2.5葉) 草丈11～12cm 7cm, 3cm, 12cm, 4.5cm, 3.5cm</p>	<p>中苗 (3.5葉) 草丈13～15cm 4cm, 8cm, 4cm, 13cm, 4.5cm, 1.5cm, 1.5cm, 4cm, 2.5cm</p>	<p>密播・密苗 草丈10～15cm 6～9cm, 10～15cm, 2cm, 4～5cm, 1cm</p>

大きく育った苗に弁当持たせて素早い活着

田植えの1週間前に弁当肥として追肥を行います。苗が栄養不足状態で田植えをすると活着（発根）に時間がかかってしまい初期生育に影響します。田植え時期に低温や曇天が続くような場合は必ず追肥をしてやりませぬ。苗をよく観察して葉数や葉色に応じた追肥を行ってください。

育苗期追肥の目安（箱当たり窒素g）

葉齢	稚苗	中苗
1.5葉期	1g	—
2.0葉期	—	1g
3.0葉期	—	1g

育苗追肥資材例

資材名	現物量	窒素成分	水量
液肥2号	10ml/箱	1.0g	1,000ml/箱
サイコー12号	8g/箱	1.0g	—

※サイコー12号は散布後にかん水を行います。

苗いもち防除を確実に実施

いもち病菌は、乾燥状態の稲わらや籾殻に付着し越冬します。育苗ハウス周辺に潜んでいるいもち病菌が苗に移ることで発生を助長しますので、周辺の清掃を行い、種子消毒、育苗期防除を組み合わせ、清潔な環境で作業を行い、本田持ち込みを阻止してください。WCSや飼料用米も必ず苗いもち防除をしてください。

薬品名	防除時期	使用基準	使用回数	備考	タフブロック併用
ベンレート水和剤	播種時～播種14日頃	500倍液 500ml/箱	1回	かん注	×
ビームゾル	緑化始期	500倍液 500ml/箱	1回	かん注	○

※いずれも育苗箱への苗いもち防除は使用回数1回までです。 ※ビームゾルはWCSへの登録がないため、ベンレートを使用する。

もみ枯細菌病対策

もみ枯細菌病対策は、種子消毒とエコフィットを使用しましょう。また、病原菌増殖に適した環境を作ってしまうと発生が多くなるので、薬剤防除とあわせて、そうした環境を作らないようにしてください。

もみ枯細菌病を増やさない環境

エコフィット適用作物と使用方法

厚播きはしない。	出芽温度32℃を超えない。	作物名	希釈倍率	使用液量	散布時期	使用回数	使用方法
被覆期間を過剰に長くしない。	出芽後の再被覆はしない。	水稲	100倍	—	催芽時	1回	24時間浸種
緑化期以降は25℃以上にならないようにする。	過湿にしない。	水稲箱育苗	10倍	1箱あたり500ml 1箱あたり50ml	播種時		灌注 散布

育苗期における主な苗立枯病

病名	ピシウム菌(別名:ムレ苗)	フザリウム菌	リゾプス菌	もみ枯細菌病
症状	出芽後、地際が水浸状に褐変、急激にしおれ枯死、カビ発生無。	発芽直後～、根・地際部褐変、黄化枯死。地際部白又は紅色の粉状カビ。	種子層・床面に白いカビ。出芽・生育・根の発育不良。	新葉基部と葉鞘部が白色～淡黄色→腐敗枯死、新葉は容易に抜ける。坪枯れ症状。
原因	温度管理とかん水方法(急激な温度差、日中のかん水)。	過度の乾湿、昼間30℃以上夜間10℃以下の管理。	過度の乾湿、出芽期間32℃以上の管理、育苗資材の不衛生。	循環催芽で発生拡大、出芽温度が32℃以上、被覆資材の二度掛け、育苗資材の不衛生。
対策	タチガレエースMかナエファインの使用、日中のかん水はくみ置き水を使用し温度差を解消。	タチガレエースMかナエファインの使用、温度管理、肥料切れ注意。	育苗箱・出芽器の洗浄、施設清掃、播種時の水量確認。播種時ダコニール1000かダコレート水和剤、ナエファインの使用。出芽期間の温度管理。	エコフィットの使用、発生確認した場合、発病箱をハウス外へ隔離する。